調査報告

精神障害当事者に対するグループインタビュー

ー就労経験を継続支援の知識へー

大川　浩子・古川　奨*・本多　俊紀*

（2011年1月13日受稿）

抄録：　近年、障害当事者に対する就労支援の必要性は増大しており、特に、精神障害当事者のハローワークにおける求人登録は著しい増加を示している。今回、我々は、就労継続の支援を目的にグループインタビューを実施した。協力者は就労経験がある精神障害当事者6名である。結果として、多岐にわたる就労経験及び離職経験が語られ、就労時の障害の開示/非開示についてもメリットでデメリットがあげられた。しかし、障害を開示して就労するメリットは少なく、障害非開示による就労の継続性についても意見が分かれた。また、就労継続に関する工夫としては主に薬があげられ、特に工夫していないという意見も聞かれた。これらの点から、日常の中で意識しない工夫が行われている可能性や他の当事者の経験が伝承されていない可能性が考えられた。今後、当事者の経験を活用した就労支援が必要であると思われた。

はじめに

平成21年度のハローワークにおける障害者職業紹介の状況は、新規求職申込件数が125,888件と前年度よりも増加しており、その内、精神障害当事者は33,277件と約3割を占めている[1)]。一方、岩永ら[2)]は、ハローワークから職業紹介を受けて就職した精神障害当事者の4～8ヵ月後の定着率としては42％が離職し、その理由の8割が自己都合であると報告している。これらの点からも、精神障害当事者の就労継続は重要な課題になっていると思われる。

今回､我々は就労経験がある障害当事者に対し、就労継続に関する支援を検討することを目的にグループインタビュー法を用い調査を行った。グループインタビューでは、経験した仕事の内容や障害の開示・非開示、受けた支援、就労継続のために受けたい支援等について尋ねた。これらの結果から、就労継続支援に対する考察を加え報告する。

方法

グループインタビューの一般的な枠組みと手順については過去の報告[3) 4)]で詳細に述べているので、今回は、本研究での手順のみを述べることとする。

先ず、本研究の流れは図1の通りである。最初にインタビューガイド（表1）を作成し、その後、札幌市内および近郊にある通所施設（授産施設、地域生活支援センター等）の中から、研究への協力が得られやすいと考えられる11施設に対し、研究に協力してくれる就労経験のある障害当事者の紹介依頼を行った。この際に、現在の就労状況については問わなかった。最終的に、6名の精神障害当事者（以下当事者）から同意を得ることができた。なお、グループインタビューに参加した協力者の属性は表2に示したとおりである。また、

北海道文教大学人間科学部作業療法学科
*特定非営利活動法人コミュニネット楽創

協力者の経験職種や年数は表3にまとめた。

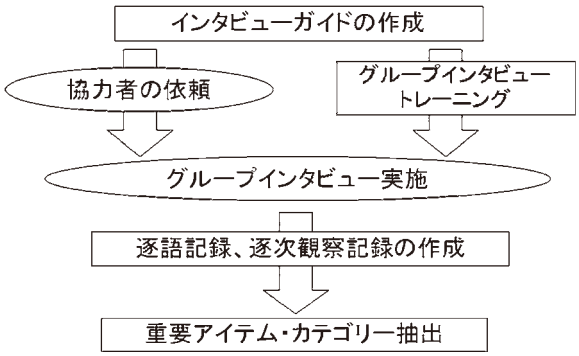

図1　グループインタビューの流れ

表1　インタビューガイド

1. 目的
障害当事者（以下当事者）が継続的な就労を行うためには就労後の支援が必要である。就労後の適切な支援を検討するため、当事者が離職にいたる原因も含めた経験について知り、継続就労のために必要と感じている支援として当事者が何を望んでいるのか知ることが重要である。従って、本研究では当事者の就労経験とそれに対する支援についてグループインタビュー法を用い調査研究を行う。

2. 対象
過去に就労しかつ離職の経験がある当事者（精神、高次脳、軽度発達、軽度知的）でその経験を話すことに了承が得られる者。離職の回数及び現在就労しているかは問わない。

3. インタビュー内容
1)全般的な仕事の経験と内容（病前・病後を問わない）
2)病気・障害を得てからの仕事の経験と内容
3)就労継続のために必要な支援・受けたい支援

グループインタビューは2007年9月に実施した。インタビュー内容は、①全般的な仕事の経験と内容、②病気・障害を得てからの仕事の経験と内容（障害の開示・非開示を含む）、③就労継続に必要な支援、今後就労継続のために受けたい支援について90分のインタビューを行った。データの分析は音声記録とビデオより逐語記録、逐次観察記録作成し、その後、各担当者（5名）が意味のある項目を抽出し、カテゴリーを作成した。そして、各担当者が作成したカテゴリーを全体で検討し、決定した。最終的には、これらの結果を基に、今後必要となる就労支援（特に就労の継続に関して）の考察を行った。

表2　グループインタビュー協力者の構成

番号	年齢	現在の仕事	経験職場数	診断後の就労	支援
1	30代	無	13	有	有
2	30代	無	3	有	有
3	50代	無	7	有	有
4	30代	無	10	有	無
5	40代	無	3	有	無
6	40代	無	3	有	有

表3　グループインタビュー協力者の職業経験

番号	経験職種	就労年数	診断後の年数	障害開示の就労経験	就労支援の経験
1	販売、清掃、派遣、営業	7年	1年弱	有	－
2	販売、理容師、検品	4年	4年	無	－
3	喫茶店、病院雑務、郵便局、配膳、清掃、受付	2～3年	2～3年	有	職親（1年半）
4	事務、物流管理、駐車場係、販売、運送業、ガードマン	5年	5年	無	－
5	プログラマー、データ入力、配送	11年	6ヶ月	無	－
6	サービス業、機械操作、営業	1年	1年	無	－

結果

当事者から話されたことは、「就業」「仕事への思い」「障害の開示/非開示」「就労継続への工夫」「離職の理由」「サポート」「社会」のカテゴリーに分けることができた（分類されたカテゴリーの詳細な内容と代表的な発言は付録を参照）。また、各カテゴリーの相互の関連性を明確にするために図式化を行った（図2）。

今回の結果を文章化すると、以下の7点にまとめることができた。

①就労経験（求職方法、雇用形態、業務内容、会社規模等）及び離職理由（職場・職務内容、体調の不調、家庭の事情、複合した事情）は多岐にわたっていた。

②仕事に対し、就労したいという希望と体調を崩すのではないかという不安、そして一部の人は就労は無理というあきらめの気持ちを持っていた。

③社会に対して、変化を期待する声と期待しても変わらないという不満の両方が聞かれた。
④就労継続の工夫としては薬をあげる方が多かったが、特別工夫していないという意見も聞かれた。
⑤就労後について、相談にのってくれるサポーター以外に、施設や障害のある仲間とのつながりを求めている方が多かった。
⑥障害の開示/非開示について、経験によるメリット・デメリットが話された。その中で、開示のメリットは少なかった。
⑦全ての協力者に障害非開示での就労経験があり、その経験から、非開示でも就労できるという方と非開示では就労が続かないという両方の意見が聞かれた。

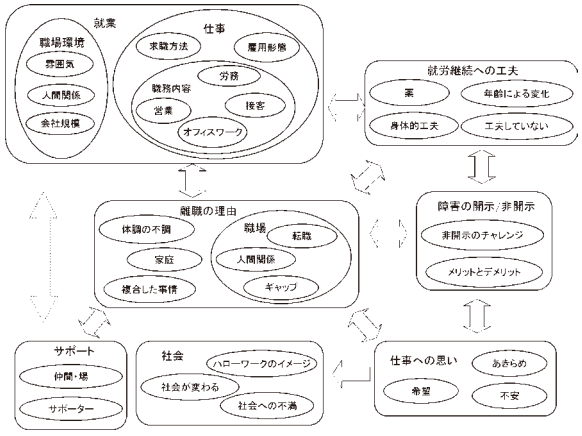

図2　就労継続支援に関する当事者に対するグループインタビューの結果

考察

本研究の結果から、当事者の就労経験や職種、離職理由は多種多彩であり、就労支援における個別性の大切さが再確認された。また、一部の参加者から就労への不安とあきらめが語られており、背景として今までの就労経験や年齢、病状等が次の就労へのチャレンジが難しいと感じさせていることが考えられた。これらの点は、以前、我々が報告[3) 4)]した就労支援においてリカバリーや希望を大切にすることが重要であることと一致していると思われた。

また、今回の協力者は障害非開示での就労経験が多く、就労中に受けた支援の経験も少なかった。これは先行研究においても、当事者は非開示で仕事をしている方が多いこと[5)]と一致しており、結果として、支援に対するイメージを持ちにくいことや限られた経験の中で支援について判断している可能性があると推測された。そして、就労継続の工夫として主に「薬」があげられており、特に工夫していないという意見も聞かれていた。これらは、日常の中で意識しない工夫が行われていることや他の当事者の経験を聞き自分の工夫として活用する機会がない可能性があると思われた。しかし、サポートとして場・仲間の必要性が話されていることから、専門家の支援だけではなく、仲間同士のサポートの大切さを当事者自身も感じていると思われた。

以上の点から、当事者の就労継続に関して、1）個別性を重視した支援、2）就労支援に関する情報提供、3）当事者間での支援が就労継続に重要ではないかと考えられた。以下に具体的な方法を述べることとする。

1）個別性を重視した支援

過去の研究結果[3)]と同様に、当事者の経験職種、離職理由等が多種多彩であることが示された。これは、当事者が就労への考え方や就労継続に感じる課題、職種への興味等はかなり個別性が高く、就労継続支援においても個別性を重視した支援が必要であると考えられた。個別職業紹介とサポート（Individual Placement and Support：以下IPS）モデルは、アメリカで実践されている重度な精神障害当事者に対する援助付雇用である[6) ~ 8)]。このIPSでは、個々のクライアントに合わせた継続・同行支援が必要に応じて提供される[9)]。更に、就労を経験することから新たなことを学べるという視点を持っているため、当事者が離職を希望した際に、必ずしも離職がデメリットばかりではないととらえている。離職については、当事者の生活や人生を含めて、適切な辞め方やメリット・デメリット

を一緒に考える必要があり、この様な支援が、その後の就労継続を導くと思われる。従って、離職の支援も含めた個別性を重視した支援が重要であると考えられる。

2）就労支援に関する情報提供

今回の参加者で障害を開示した就労経験のある当事者は2名であり、就労中に支援者からの支援を受けた経験がある者も少なかった。そのため、障害を開示して就労することのメリットや支援に関するメリットが少ない結果になったと思われる。また、自分で行っていた就労継続への工夫としては、薬（服薬）が一番多い状況であった。これらのことから、a）当事者間で就労に関する経験を語り、分かち合う機会が少ない、b）支援者から就労支援に関する情報提供の機会が少ない（あるいは限られている）、c）a）、b）を解決するための場の設定がない、の3点が背景として考えられた。これらを解決するためには、ⅰ）就労前、就労後を通じて就労経験を語り、情報提供を受けられる場をつくる、ⅱ）支援者が就労支援に関する情報を得ることができる研修会の定期的な開催等があると思われる。ⅰ）については、就労前に当事者が語れる場や情報提供を受ける場は比較的あるが、就労後は職種等で勤務条件（曜日、時間帯）にバラつきがあり、現在の制度では実施に困難な点が多いと思われる。就労・生活支援センターや札幌市の就労者支援型地域活動支援センター等がその一部を担っていると思われるが、就労中の当事者が気軽に訪れることが出来るほどの数が設置されているとは言い難い。今後、様々な施設において、利用できる曜日、時間が多様化することも1つの方法であると考えらえる。また、支援者に対する研修会は、以前よりも増加しているも、「障害者の一般就労を支える人材の育成のあり方に関する研究会報告書」の実態調査報告では、就労移行支援事業所職員の就労支援に関する外部研修受講率は低いことが示されている[6]。今後、就労支援に携わる人材育成という点からも、支援者に対する研修会の充実が求められると思われる。

3）当事者間での支援

2）就労支援に関する情報提供と関連する項目であるが、就労後も場や仲間とつながることを希望している当事者がおり、場を設ける点については施設が曜日・時間帯を多様化させることでも対応できると思われる。一方、当事者が就労している当事者を支援することも1つの方法であると考えられる。現在、退院促進支援事業でピアサポーターが導入されているが、就労に対する不安や抵抗を持っている当事者に対し、就労している当事者をモデルとするピアサポーターは有効であると考えられる。しかし、就労継続の支援を考えた場合、「ピア」という観点から、ピアサポーター自身も就労中である方が効果的であると思われる。しかし、退院促進支援事業で活用されているピアサポーターの予算規模が各自の経済的自立が難しいことを踏まえると、ピアサポーターという職業よりも経験や工夫を分かち合う場と方法を検討する方が実現可能であると考えられる。その場と方法の１つとしてWRAP（Wellness Recovery Action Plan）[11] あげられる。WRAPではプラン等に関して参加者同士が自分の経験やアイディアを出し合うことが出来る、WRAPクラスと呼ばれるグループがある。このグループは研修を受講したWRAPファシリテーターによって進行されている。このような場があることで、当事者同士がお互いの経験や工夫を取り入れる機会を作り出すことになると思われる。

結語

就労後、障害を事後開示したがメリットを感じないと答えた者が28.7％いたということを吉田ら[5] が報告しており、障害の開示・非開示については今後も継続的に検討する必要があると思われた。また、今回の結果で当事者が場や仲間とのつながりを就労開始後も望んでおり、場やつながりを保障できるシステムを検討することも必要であ

ると思われた。

謝辞

本研究を実施するにあたり、グループインタビューにご参加いただいた皆様、並びにグループインタビューへの協力についてご検討いただいた施設の皆様に感謝いたします。

文献

1）内閣府：厚生労働白書　平成22年度版、58-83、東京、日本印刷株式会社、2010.
2）岩永可奈子、相澤欽一、村山奈美子、大石甲、川村博子：ハローワークにおける精神障害者に対する新規求職登録及び紹介就職等の実態調査について（2）―定着状況について―、第17回職業リハビリテーション研究発表会発表論文集：18-21、2009.
3）大川浩子、本多俊紀、脇島久登：就労支援に関する障害当事者へのグループインタビュー、北海道文教大学研究紀要、32：93-102、2008.
4）大川浩子、本多俊紀、脇島久登：就労に関する障害当事者と支援者の意識の比較～グループインタビューを用いて、北海道文教大学研究紀要、34：93-102、2010.
5）吉田光爾、田川精二、伊藤順一郎、田村理奈、相澤欽一：就労における精神障害者の障害開示状況の実態、精リハ誌、11（1）：66-76、2007.
6）香田真希子、相澤みな子：ACT-Jにおける地域生活支援の実践からみえてきたサービスのあり方、従来のサービスとの相違点、OTジャーナル、39（10）：999-1003、2005.
7）香田真希子：社会的入院者の退院支援にACTモデルから活用できること、OTジャーナル、38（12）：1097-1101、2004.
8）大島巌、香田真希子：IPSモデルを用いた個別就労支援－ACT-Jプロジェクトの取り組みから、精神認知とOT、2（4）：289-293、2005.
9）Deborah R. Becker、Robert E. Drake：A Working Life for People with Severe Mental Illness. 2003. 大島巌、松為信雄、伊藤順一郎監訳：精神障害をもつ人たちのワーキングライフ、156-166、東京、金剛出版、2004.
10）障害者の一般就労を支える人材の育成のあり方に関する研究会報告書（厚生労働省）：http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/03/dl/s0301-2c.pdf
11）久永文恵、坂本明子：日本上陸！ WRAP－元気回復行動プランって何？、こころの元気+3：4-7、2007.

付録　カテゴリーの内容と代表的な発言（内容については個人情報保護のため、固有名詞を記号に置き換える等情報が加工されている）

1）就業

就労では「職場環境」と「仕事」について話された。職場環境では「雰囲気」「人間関係」「会社規模」が仕事では「求職方法」「雇用形態」「職務内容」が話され、職務内容では「オフィスワーク」「労務」「接客」「営業」が話された。

①職場環境

ⅰ）雰囲気

「選ぶ基準が、自分ではなんか違ってたとは思うんですけども、自分の中で知っているような名前の会社をわりと選んで、そこに行けばなんかこう…楽しいこともあんのかなっていうような基準で選んでいたと思います」

「やっぱり、基本的には、家族的な、会社が、自分は好きなもんですから」

ⅱ）人間関係

「一応、友達が社長やってますけども、どうしても社長って言えなくて、なあなあ的な感覚になってしまって、それも、良くなかったなって思いましたね」

「9人のうち男性、僕一人だったんです。比較て、女性でも僕よりもちょっと年上の方とやってたん

ですけれども、そういった面で、変な言い方すればかわいがられたっていうか、パソコンとか、おかしくなったからちょっと見てよってみたいな感じで、気さくに入れてもらえたので、そういった面ですんなり入れて、半年の契約期間だったんですけれども、それがすんなり、クローズでもいけたかなと」

ⅲ）会社の規模

「人数は自分を合わせて5人」

「販売は、○○とかあまり大きな規模でないと思うんですけど、でも、そんなに、小さな規模でもないと思うんですよね」

「新規の会社で、立ち上げたばっかりの、会社だったんですけれども、そこで250ぐらいの□□の方はそうだったんですけれども」

②仕事

ⅰ）業務内容

a）オフィスワーク

「郵便局もパートで働きました」

「親会社である××の各種製品の出入庫管理といったような物流管理ですね、そういった業務をデスクワークを、5年いたしました」

「電機メーカーに勤めまして、そこで、開発技術部に配属されて、言ってみればAV機器のプログラムをくんでました」

「今度、データ入力の仕事があったんです」

「2、3社は、同じくデータ入力の仕事とか、全く別な配送の仕事にも就いたことがあります」

b）労務

「○○宅配の夜中の仕事をやったんですけども」

「デパートのガードマンを、8ヶ月ほど務めました」

「荷物作業っていうか、ホテルんところで、荷物を、出し送りとか、そういうことはやりましたけれども」

c）接客

「そうですね…販売と…理容師と」

「コンビニの××ですか」

「クリーニングの受付とか」

d）営業

「電話での営業っていう感じで仕事をしました」

「花の営業…を、行くように、行けるようになったんですけれども」

ⅱ）雇用形態

「配膳会社ですから、だからそこで、派遣業務ですね」

「病院は、正職ですね。あの…ちゃんと8時間労働してきてましたし」

「（正職員とパートと）半々くらいです」

ⅲ）求職方法

「一番多かったのはやっぱり、アルバイト情報誌…ですね」

「理容師になりますとどうしても、個人でやっているところが、多いもんですから、それも学校でここがあるぞって。感じで、言われて、行きましたので」

「新聞で探してましたね」

「ハローワークとか、そういうところ行かないで、そして自分でみつけて、それで…うん、できるようなことなって、やった。」

「実はそれはあの…知り合いというか、その当時通っていた作業所のスタッフの方や、仲間の方を通して、紹介していただいたとこだったので」

2）仕事への思い

仕事への思いでは「希望」「不安」「あきらめ」があげられた。

① 希望

「（一般企業で働きたいという希望は）やはり、ありますね」

「単独でやってる仕事がいいんですね。しかも単純明快に。ルーチンワークというのが、繰り返しの作業ですね。その作業だったらすごく、自分でも、自負してるんですけど正確に精密にやれる位の能力は持ってるというふうに自分では思うくらいなんですけど」

② 不安

「体がどうしても、もう仕事に出ると、もう体がおかしくなっちゃうんですね、心身ともに。そ

れで、どうしても続けられなくなっちゃって、社会に出るって事がおっかないってことになりまして」

「1年ほど前に、社会復帰したいっていう意欲が芽生えまして、だけどやっぱりアルバイトにしても社会に出るのは怖いという、二の足踏んじゃうっていう」

「社会復帰するにはちょっと、おっかないなと思って、作業所だったらいいかなと思って通っていますね」

「実際に自分は病気になってしまっているわけで、そういった面で、また頑張りすぎるだろう、病気がぶりかえす、自分の気持ちに関係なく、気持ちがゆがんできてる、ゆがんでしまうっていうか、そういう気持ちがまた出てくると思うので」

③ あきらめ

「いきなりこういうふうになるんだったら…やりたくても…1年、休んだですんよ」

「自分では一般就労としては厳しいと思うんですよ」

3）障害の開示/非開示

障害の開示/非開示では「メリットとデメリット」と「非開示でのチャレンジ」があげられた。

① メリットとデメリット

「今のところオープンにして、面接の結果がいい結果が得られていないので、ちょっとそのへんがまだちょっとよく、分からないんですけれども、気持ちの上では、履歴書の中でもやっぱり、会社に勤めたところ、その次の所にブランクがありますし、3社目も3年前なので、3年前から現在にブランクがありますので、オープンにしたら、その、理由がはっきりしてると。で、クローズにしたらそこを何としても埋めなければならないっていうのがあるので、そういった面では、面接に対しては比較的楽できるというのがあります」

「（障害のことは隠していたのだが）雰囲気的に、病院の時は婦長さんは分かってたたみたいですね。後から思えば」

「薬も隠していましたし、薬見せないように。でも、見られてしまったん、時どうすればいいのかと」

②非開示でのチャレンジ

「全部開示していません」

「やっぱ、ばれちゃったんですよね。かえしましたけども。だけど、やってみたかったんでしょうね。自分ではね。なんかできるではないんだろうかと思って。トライしてみたんですけど、やっぱりちょっとダメでした」

「病院の先生と、ハローワークのみどりの窓口の方とは、相談してたんですけれども、その時に、まだその当時は、クローズの方がいいんじゃないかっていう、どちらかというとオープンにしない方がいいんじゃないかっていう、風潮で、そういう雰囲気があって、クローズで、ずっと、就活はしておりました」

「特にクローズにしてて、問題は全くなかったという感じです」

4）就労継続への工夫

就労継続への工夫としては「薬」「身体的工夫」「工夫していない」があげられた。

① 薬

「具合悪くなれば派遣ですから、こちらから行けないということも言えますし、薬を飲み飲み行ったこともありますし」

「とりあえず、クローズだという事で、病院の先生と相談しまして、お昼には薬を飲まないっていう朝と晩だけっていう形に。それまでは、朝、昼、晩飲んでたのを、昼は抜かしてもらうっていう、ふうにお話ししました。それだけです」

「隠していました。隠しながらも、飲みました」

② 身体的工夫

「そうですね、最初は良かったんですけども、やっぱり腰痛になやまされるというか、があったんで、先生に相談して、整形なり違う方にも行こうかと思ったんですけども、今住んでいる所の近くに銭湯があるので、そのできるだけこう銭湯に行ってこう、なんていうんでしょう、こう打たせ湯みたいな感じで、こう乗り切ったというか、わ

りとこう気分的にも、こう広い風呂で、こうリラックスできて入れたので、それは、しばらくこう習慣にしてました」

「あんまりそんなに睡眠を、なんちゅうんですか、寝不足しないとかぐらいなもので」

③工夫していない

「いや、そこまで考えてないでやっていました」

「以前と変わりなく、就業できていたので、特に、気をつけていた事はないですが」

④年齢による変化

「落ち着いてくるんですよね、てんかんって、年を取っていけば、簡単に言うと。それで、ちょうど、がっちり合うんでしょうね。年とって26、7位になって、薬がちょうどよく、マッチするっていう感じになってくるもんですから、その間に、やっぱり、波があって、倒れたりとか、こうなってくると思うんですけど」

5）離職の理由

離職の理由としては「体調の不調」「転職」「人間関係」「ギャップ」「家庭」「複合した事情」があげられた。

①体調の不調

「その前に、ちょっと病気の方で、医者の方で理容師の方はだめですよって言われまして、当時ですね。今はいいんらしいんですが、それでちょっと辞めたっていう形であるんですが」

「病気もちょっと、その頃重たかったとその時は思います。で、病院もそんなに通えなかったんですよね」

「長く続いたこともあるけども…でも、いろいろやってきましたけども、どうしても、病気が、さわるっていうか。薬飲みながら、も、やったこともあるんですけども、でも、なかなか、長くは続きませんでした」

「最終的には5年、丸5年って、結局また、体がつぶれて、やめてしまったんですけども、5年間勤めまして」

「人の目が気になるといいますか、そういう面がちょっと、強くなって、2、3日もしくは1週間くらいで辞めてしまうっていうのがちょっと、2、3社続きました」

②転職

「東京の方に、行かないかっていう話がありまして、そっちの方には行く気がなかったっていうのがあるんですが、ちょっと、販売の方に、まあ嫌気をさしてるっていう理由っていうと、まあその２つですね」

「仕事とか関係ない話で、僕自身は、生まれは☆☆なんですけれども、Iターンというかたちで、あの××の方に来たいなぁっていう考え、考えまして、あのそれでまあ、××の方にそのまま、事業所があれば、良かったんですけれども、丁度無かったもので、転職せざるを得ないというかたちで、はい」

③人間関係

「そうですね、あと、やっぱり人間関係が、清掃の時は、周りの方がやっぱりすごくこう、気遣ってくれたんですよね。その次のところはやっぱり話さなかったので、自分の方から、こう逆に人間関係をうまくつくっていけれなかった気がします」

④ギャップ

「それでやっぱり体つぶれて、不規則勤務、24時間の不規則勤務だったので、そういう事情もあって、またどうしても結局、ぽしゃっちゃって」

「そうですね…少しこう甘く考えていたっていうか、いたところがあったと思います」

⑤家庭

「いろんな家庭的な事情もありましたし、子供もちっちゃかったもんですから」

「子供ができたんで、3ヶ月で辞めたんですけども」

⑥複合した事情

「□□にいたころはちょっと病気が今みたく安定はしてなかったんですよ。それで、状態が悪化している状態で子育てしていたもんですから、それで、家の事情もありまして、そうですね…立ってけない状態が続いたこともあって、色々あって、

主人の関係で、そして、いろんな事情がからまってるんですけども、結局、病気が重なっちゃってるんですよね」

6）サポート

サポートでは「仲間・場」「サポーター」があげられた。

① 仲間・場

「今通っている作業所の雰囲気が僕はすごく好きなので、例えば、こう就労した後でも、こう、なんらかのかたちで通所ができる、休日に通所できたりとか、そういうふうになれるんだったらいいなっていうのは思ってます」

「確かに心のケアも必要だし、それを分かってくれる、なんか愚痴もいいたくもなりますよね、社会にでると。それを、こうこうこうだよって、なんか、言わないでいると、心の中が、ちょっとくもるっていうか、それを、発散できる場所、そういう人とかに出会えて、私、今はいるんですけども、これからちょっといなくなるかも分からないですけれど、だけどもし、そういう人も必要ですし」

「仲間も必要なんですよね。1人だけじゃだめなんですよ、やっぱり。仲間っていうか色んな個々、いろんな障害をもった仲間が、やっぱり、助け合いながら、で、やっぱりやっていかなければならだめなんじゃないのかなって思います」

②サポーター

「僕も、専属のサポーターみたいな方が、常にいてくれれば、また自分が壁にぶつかったり、心身ともにおかしくなってきた時に、なんでも告白して相談にのってもらえる方が横にいればいいなって思ってますね。それは、その第三者的なっていうか、第三者の機関の人間じゃなくて、その同じ会社の先輩や上司の方ですね」

「そういった面で、そういった時に、今通っている、△△のスタッフなり、そういった人と、悩み相談というか、友達感覚で、普通の友達に悩みを話すっていうのと、あのもうひとランク上のちょっと専門家の話し相手っていうんですかね、っていう立場で、話を聞いてもらえたら、自分自身が楽になるから、またそれで、心をリフレッシュさせて、また、次の日に仕事、に挑めるっていうかたちで、そういった形で、サポートしていただければなっていうふうには感じているんですけれども」

7）社会

社会では「社会が変わる」「社会への不満」「支援機関へのイメージ」があげられた。

①社会が変わる

「それも社会全体が変わるって事ですね」

「今、こう社会の中で、社会がゆがんでて、会社に勤めている人が、過労で倒れたりとか、言ってみれば自殺したりする人が増えてきてるんですね。そういう社会のゆがみは、直してほしいとは思ってるんですけれども」

②社会への不満

「社会が変わっていかなければ障害者も変わらないと思います」

「今のところは、障害者自立支援法ってものはでてますけれども、こういうとこ、精神障害者とか、そういう障害者団体ってのは、社会だけを待ってる、社会で待ってるだけじゃなくて、精神障害者っていうもの自体が動く、動かないとこれ、変わらないですよね」

③支援機関へのイメージ

「みどりの窓口に行けば、また、あんたは一般、一般で勝手にやってくださいと、言われるらしいんですよ。だからそういうところじゃやっぱりやってられないし、だから、そんなことじゃ、自分でさ、調べるしかないなと。で、その時や、最初ん時あたりはもうそうやって、調べてましたけども」

Group Interview of Persons Living with Mental Illness

− Utilizing Work Experience in the Knowledge of Continuous Support

OHKAWA Hiroko, FURUKAWA Tsutomu and HONDA Toshinori

Abstract: In recent years, the need for work support for handicapped persons has increased, and particularly for job application registration at job-placement offices by persons living with mental illness. At this time, a group interview was carried out regarding support for continued work. Six people living with mental illness and with work experience were interviewed. As a result, experience working and experience losing work over a wide range, and the merits and demerits regarding disclosure / nondisclosure of disability at the time of employment, were discussed. However, merits of disclosure at the time of employment were few, and opinion was divided over continued work under the condition of nondisclosure. Moreover, medicine was mainly thought to be the device for continued work, but on the other hand, others did not have a specific device. From these points, the possibility of unconsciously having a device in daily life, and the possibility that experiences of others living with mental illness is not shared, were assumed. Work support, which utilizes the experiences of persons living with mental illness, is thought to be important from now.